

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部 英語学英文学専修 2年 坂本 晃平

今回の研修の主たる目的は、京都大学文学研究科とHeidelberg Center for Transcultural Studiesで設置される予定の共同学位プログラムを前に、海外大学の学習環境を見学することであり、ハイデルベルク大学・ストラスブール大学を訪問しました。

特に今回のプログラムでは、よりよく海外大学の環境を肌で感じるために、実際に現地の学生とシリア難民などの「移民問題」をテーマにディスカッションを行ったりもしました。特にハイデルベルク大学の学生とのディスカッションは白熱したものであり、ヨーロッパの学生が「移民問題」について、自分たち自身に関わる問題として大きな関心を寄せていることが覗えました。また、彼らの視点もメディアの報道に縛られた一面的なものではなく、移民問題、すなわちRefugee Crisisが本当に“Crisis”であるのかを、歴史上の難民問題と比較したりしながら多様な視点から分析していくもので、大いに感心させられました。また、昼食を取りながらの交流の時間には、中国文学や日本文学をはじめ西洋文学、東洋史、西洋史と幅広い分野が話題にありましたが、文化同士の出会いという視点から文学と歴史とを関連づけながら読み解いていく話はとても興味深く感じられました。こうしたことから、この様な多様な視点に満ち溢れた場で学習する機会のある共同学位は非常に有意義なものであると思われまます。

また、研修の中でハイデルベルク大学・ストラスブール大学の日本学科を訪問しましたが、ハイデルベルク大学では明治時代を中心とした文語、ストラスブール大学では古語の授業が必修である、ということに驚かされました。実際に学生たちも夏目漱石や百人一首を読んだと言っており、両大学日本学科のカリキュラムが単に実用的な語学の学習に留まるものではない、重厚なものであるとの印象を受けました。日本での外国もしくは外国語学についてのコースも同様に、文化の深層までの理解にしっかりと取り組むべきであると感じずにはいられませんでした。一方で、日本学科の学生の多くが日本への留学を経験しており、大変流暢な日本語を話したのも印象に残っています。日々英語を外国語として学んでいる私にとって、これは多きな刺激になりました。

最後に、私は将来、海外の大学院なども視野に入りたいと漠然と思っていたのですが、今回の派遣でまた一つ共同学位と言う選択肢が見つけられたことをありがたく感じています。今後共同学位のような魅力的な選択肢をハイデルベルク大学と意外にも広げていくことは、大変意義のあることではないでしょうか？